

ガールズ&パンツァーwithナイトメア

tubaki7

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車に乗るのが女なら、それを護るのが男の——騎士の努め。そんな、ちよつとイレギュラーな世界に生きる少年と、戦車に乗る少女達の青春の奮闘記録。

※戦闘描写はうまくありません。戦車の知識はアニメを見ながらでほぼ乏しいのでご了承ください。

目次

第0話	〜プロローグです！〜	1
第一話	〜戦車道、はじめます！〜	10
第二話	〜戦車、乗ります！〜	19
第三話	〜練習試合、開始です！〜	29
第四話	〜激しい戦いです！〜	35
第五話	〜抽選会です！〜	41
第六話	〜一触即発です！〜	53

第0話　　プロローグです！

立ち込める暗雲。先ほどまで晴れていたにも関わらず、この天気の変わりように流石に不安を抱く。世界一身長が高いとされたロバート・パーシング・ワドローの身長は生前最も高い時期で272cm、それよりも高い4.4m程の高さにある視界から入って来る情報を、内臓のOSが処理し瞬時に最適化していく。それを見ながら、周囲の状況を整理して最前線の状況を逐一仕入れる。山岳地帯。溪谷をゆっくりと進んでいく隊列が観える。規則正しく一列に並んで進んでいく、その先頭付近に一輛旗を付けた車輻を拡大する。順調に事を運んでいるようでホッと息をついた。

『心配か？』

不意に耳のインカムから聴こえてきた声にビクツと思わず肩を強張らせてしまう。別に、この声の主が苦手とかそういうわけではない。ただ、いつまで経つてもどこか年上めいた声色が聴きなれないだけだ。それだけに、少し心で距離感を置いてしまう。

「べ、別に。ただ、アイツ性格の割にドジだから・・・」

苦しい言い訳をしてそんなつもりはないと答える。実際、不安ではある。だがそれを言ってしまったては後で揶揄われるのが目に見えているし、それよりも前に今聴こえている音声の主に対してちよつとした「裏切り」にもなる気がしたから。だからそんな態度をとる。

雨脚が強くなり始めていた。

『心配することはないさ。あの子ももう立派に先陣を切れるし、こうして私の副官も務めているんだ。・・・しかしまあ、姉として少し寂しくはあるな』

珍しくしみつたれた事を言う。何時もは凜として冷静沈着、怖い程に落ち着いている彼女がそんな事を零したのが新鮮でならない。「珍しいな」と言葉にしてみれば、意外な一言が返ってきた。

『これでも好いた男の前では素でいたんだよ』

親が決めたことだ。反論しようとしたが、あながちまんざらでもないから否定しない。そもそも、それを否定したところで彼女の士気

に影響・・・というのは些か考えすぎるかもしれないが。ともかく、触らぬ神に祟りなしだ。言い返さない方が余計なイレギュラーを招かないで済む。

雨が本降りになる。今いるこの場所は、周囲からは完全に遮断された人間二人ほどがやつと入れる程度の小さな広さ。目の前には画面越しとは思えないほどにクリアな世界が広がっている。天井を雨粒が叩く音がわずかに聴こえるが、特殊素材でできたこの空間には余程集中しない限りは外の音など聴こえないような設計になっている。彼女達が乗る戦車よりも頑丈な鉄製でできた4m越えの巨人。人の型を成し、全身を黒一色で塗られ背中にはランドセルでも背負っているかのような突出したコクピット。コンテナ、と言った方がしっくりくるかもしれない。自分も最初ソレを教科書で見た時はそんな感想を抱いたのを覚えている。

手にはライフル。これも人間が使うようなものをこの巨体に合わせ製作されたものだ。彼女らが乗るモノよりは殺傷力という点では勝っているものの、装填手がない為使い切ってしまうばそれきりの銃火器。脚部には車のタイヤを取り付けたようなものがサイドに備わっている。そして両腕には、近接用のスタン式のトンファーが折りたたまれている。

高機動人型汎用作業機体。それがこの巨人が生み出された際のコンセプト。それが時代の歩みと共に姿を変え、兵器として運用されていた時代の時の一般的な呼び名は“ナイトメアフレーム”。イギリス出身の科学者であるメア・フレームという偉人が開発した作業用ロボットであることと、武装した際の姿、さらには現在に続く“戦車道”においての戦車の護り手としての扱いからそう呼ばれている。しかしながらその稀少性とコスパの悪さからか、既存の機体数はさほど多くはない。戦車道のある学校の中でも、所有している学校とそうでない学校もある程だ。それ故に、試合に出られないこともある。

そんな機体を任されている。それだけでも、男にとっては名誉なことだ。

『戦車に乗るのが女なら、ソレに乗るのは男。硬いしきたりや文化は

私もさほど好みではないが……それでも、きみという騎士が控えているんだ。みほも私も安心して自分の役目に集中できることに変わりはない』

「……なんか俺励まされてる?」

『こういう話をすると、いつも消極的で悲観する癖があるからな。……親の間で取り交わされた約束とはいえ、大和は私の将来の夫だ。強くあってくれなくては困る』

それが本音だろ。そう言ってやりたかったが敢えて言わず、「善処する」とだけ返す。それに満足したのか、フツと笑ったような声が返ってきたのを聴いて、やはり言わない方が良かったと思う。

「にしてもまほ。いいのか?俺と雑談なんてしてて。随分と余裕じゃないか」

『こうでもしないと、実のところ私も心配でね』

「要はシスコンこじらせて限界だからはけ口に揶揄われてるだけか、俺」

『そうとは言つてな——ツ!』

突然通信が切れた。どうやら対戦相手の車輛と遭遇したらしい。砲弾が発射された音が激しくなり、撃ち合いする轟音がこちらにも聴こえてきている。

「……グラスゴー」より各車輛へ。支援砲撃を開始します」

森の中で身を潜め、手にしているライフルを構える。相手方の機体が近くにいるという情報は偵察に出ていたチームメイトから報告を受けていた。だからそちら側に向けて砲身を向けて、操縦桿に備わっているボタンに指をかける。周囲の風向き、その他諸々の気象条件を機体が自動的に算出すると、目の前のサークルが赤く光る。その刹那、銃の引鉄を引くが如くかけた指を動かした。ドン、という鈍い音を立てて砲弾が飛んで行った。結果は……ハズレ。だが当てることでが目的ではない為これでいい。相手にこちらの存在を示すことで注意を逸らすのが目的だ。大和の思惑通り、敵機はこちらに向かってきているのがレーダーでわかった。

“ナイトメアフレーム”には幾つか縛りがある。行動できるの

は、最初の内は今のようには銃火器による支援砲撃のみ。基本戦車よりも圧倒的に性能の面でも火力の面でも勝るKMFは勝負にすらならない。故に戦車に対しての直接的な攻撃は厳禁。その逆は可能。そして彼らが最前線にて行動できるのは、自軍の戦車の車輛数が一定数以下になった場合にのみ限り、どちらかがKMFを前線投入した時点で相手も動かすことが可能となる。しかし、KMF同士の牽制の仕合に関してはその限りではない。だからこそ、こうして気兼ねなく撃てる。ルールに一部例外は存在するが。

しかし、そこで事態は思わぬ方向で急変してしまう。

先頭を走っていた車輛が突如足場が崩れ川の中へと落下してしまう。それにより隊列は動きを停止。それまでは、立て直せばなんとか

なりはする。多少の損害はあるだろうが、それでもフラッグ車と自分が残っていればそれでなんとかする自信はある。隊長、副隊長である西住姉妹がいればひっくり返せる。そう確信していた。

だが、そんな大和の考えは一気に瓦解する。停車したみほの乗るフラッグ車の様子がおかしい。後退も前進もしない。どうしたんだと

拡大してみれば、フラッグ車から降りて行くみほの姿が。何をやってるんだと怒鳴りたくなったが、その降りて行った先を見て納得する。増水した川の中へと沈んでいく車輛がある。どうやら乗車している人間が出てこれていないらしい。そこにみほが助けに向かったということだ。にも関わらず、戦闘が中止される気配がない。

「みほッ！」

残り一人を引き上げたところで急に強くなった流れに呑まれ、姿が見えなくなる。それを見た瞬間、居てもたっても居られなくなった大和は機体を動かしていた。脚部の車輪、ランドスピナーを降ろして地面を走行。最高速度に達したまま、山の斜面を一気に駆け上がる。

『大和、何をしているッ！まだ「ナイトメア」の出撃許可は出ていないぞ!?!』

まほからの通信が聴こえたが、そんなことは無視して機体を川の中

へと沈める。上半身が出る程度の水位ではあるが、人間からしてみれば溺れてしまうには充分すぎる。好感度のリーダーで水の中にいるみほの反応を検知し、火器を捨てて両手を中に入れる。これ以上流されぬように位置を調整しながら、器用に彼女をすくい上げた。コックピットを開け、自身も掌で倒れているみほのもとへと駆け寄る。

「みほ、みほ！おいッ、しっかりしろ！」

大和の叫び声が木霊する。そして、試合終了を告げるベルもまた戦場に響き渡った。



イヤな夢を見た。跳び起きてみれば、汗が額を濡らしている。それを右手で触れることで理解し、溜息をつくことで心の中のモヤモヤを外に吐き出す。それからベッドから出て汗を流す為にシャワーに入る。スツキリしたところで朝食を適当に済ませ、学校に行く為に支度を整え住んでいるアパートを出る。転校してから二週間、今の生活にも慣れ始めた。

「大和くーん！」

後ろから聴こえてきた声に振り返る。自分と同じ学校の女子生徒の制服を着ている姿が、かつていた学校と違うというだけで未だに新鮮に感じる。

「おお、よく起きれたな。てっきり寝過ごして髪ぼっさぼさで追いかけてくるかと思っただけど」

「はあ、はあ・・・そっ、そんなことしないってば・・・！」

とはいえ息を切らして走ってきたのは事実。高校二年生になっても、そそっかしい性格はまだ健在らしい。そのくせ大人しくて控えめという些か面倒くさいこの幼馴染との付き合いも、もう10年になる

だろうか。

「つたく・・・行くぞ、みほ」

揃いの制服で、他愛のない話をしながら通学路を歩く。

「・・・近所になかったね、サンクス」

コンビニの前を通りながら嬉しそうに話すみほ。

「もう何回目だその話題。つか、前見て歩けよー。でない看板にぶつかるぞ」

「もう、私そこまでドジじゃな」

そこで会話が途切れた。歩みを止めて振り返ってみれば、言わんこつちやない。綺麗に顔面をステンレスの薄い素材でできた看板に真正面からぶつけて悶えている。深く溜息をつきながらしゃがみ込んで顔を押しえているみほに歩みより、手を差し出す。

「だから言つたらろ？ぶつかるつてな」

「ふええ・・・」

「ハア・・・そんなんだから二週間経つても友達の一人もできないんだよ」

大和の呟いた一言に、痛みに耐えつつもムツとなって赤くなった顔にさらに涙目になりながらも抗議する。

「それを大和君が言う？そつちだつて未だに一人も友達もいなくせに」

「あのな・・・女子高で、つい最近生徒数の減少を理由に共学になったばかりで、しかもまだ男子は俺だけ。テスト生徒って名目で入ってる俺が、どうやって友達を作れと？周りは異性しかいなくて、オマケに知り合いはお前だけなんですが？」

「うっ・・・」と、バツが悪そうに俯くみほ。それを見て、流石にマズいと思ったのか、今度は大和が「あー・・・」と声を零しながら頭を掻く。

「わるい。言いすぎた」

「・・・ううん。私も、悪かったし・・・」

気まずい雰囲気醸し出しながらも、二人は大洗女子高校の校門をくぐる。普通I科、二年A組がみほ。その隣のB組が大和の教室と

なっている。転校初日から少しの間はB組に男子が転校してくるという事でちよつとした客寄せパンダのような扱いをされていた大和だが、その人付き合いの悪さが幸いしたのか、今では腫れ物に触れるかのような感じになっており、あげくの果てには「不良」のレッテルすら出回っているほど。その為に、彼の周りにはみほの言った通り友達と呼べる存在はいなかった。

たった一人を除いては。

「おはようございます！悠木殿」

ドアを開いた途端、敬礼してはにかむ少女。癖毛と独特の口調が印象的な、大和と同じクラスの秋山優香里だ。

「・・・あのな秋山さん。その、苗字でも名前でもどっちでもいいんだけどさ。殿つてのはやめてくんねーかな？」

「あ、嫌いでしたか・・・？」

目に見えてしゅんとなる優香里の姿を見て、周囲の生徒が一瞬にしてざわつき始める。「女の子に酷い事してる」だの、「朝からカツアゲ？」だの。誤解も甚だしい。しかしそれを弁明したとしても、今更遅いわけで。だから大和は現状の回復に努めるしかない。

「い、いやア、秋山さん！いいねエその呼び方。なんかこう、古き良き日本つてーの？古風な感じでカツコイイじゃん！」

「でも、今やめてほしいと——」

「是非 継続 してく ださい」

何をやってるんだ、俺は。笑顔になる優香里を見ながらそう心の中で零した大和であった。



お昼休み。何時ものように一人屋上へとやってきた。毎回のよう
にみほが誘いに来るが、それをあえて大和は断っている・・・とい
うより、逃げている。転校早々、良くない評判の出回っている彼の傍

に居れば、必然的に彼女にもその被害が及ぶと考えての行動だった。

というのは、建前で。

実際は男子が一人だけ女子まみれの食堂に行くのが困難を極めたからである。何時もの位置に腰を下ろし、フエンスにもたれかかって弁当を広げる。親元を離れ、かつて世話になっていた家を出てからは一人暮らし。オマケに学園艦という特殊な環境にいる為、必然的に覚えざるを得なかった家事炊事の類も、今ではお手の物。そんじよこちらの女子力では張り合いにならないとまで、自信を持って言えるようになってしまった。その事に再び溜息。

まあ、自分で選んだ事だからいいんだけどさ。そう言い訳しつつ、弁当を食べる。

上を見上げれば、カモメが遠くに飛んでいる。学園艦、その名の通り、学校を含める幾つかの商業施設など街の一部が船の上にある巨大な船の事を総称している。中心が学校、つまり学生が運用しているという事もあり、そのほとんどがこの大洗女子学園に通う生徒達だ。彼女らの身内や一部商業施設の店員などを除けば、学生の暮らす、海の上を移動する学校のある街……と言つてさしつかえないだろう。作られた目的や理念などは幼い頃に習ったが、今は忘れてしまった。

どうでもいいことだと、大和はふと浮かんだ事を食後のコーヒー牛乳のパックにストローを刺しながら消し去る。中身を吸えば、口の中に甘くほろ苦い味が広がる。それを、さながら食後の一服を楽しむ大人の如く息を深く吐くことで真似てみる。未成年である為煙草は吸えないが、きつとこんな感じなんだろうともう一口。

「ああ……そーいやみほの奴、メールで友達ができたとか言つてたっけ」

昼休みに入って少ししてからそんな内容のメールが届いた。あのみほが、ドジでどんくさいみほが、だ。未だに信じられないと思う反面、嬉しくもあった。戦車なんて関係ない、純粋な交友関係。何にも縛れることなんてない普通の女子高生としての友達が、こんなにも早くできた。最初は卒業するまでできないかもなんて言っていたが、それをいい意味で裏切られた。とりあえず、一安心。

そう、思っていたのに。

「あー、やっと見つけたよ悠木ちゃん
壊す奴らが、現れた。」

第一話　く戦車道、はじめます！く

「納得いかねえッ！」

生徒会室まで呼び出されたその日の昼休み。一人では不安という事でみほについて一緒に来た武部沙織と五十鈴　華は、中から聴こえてきた声と音に思わず肩を強張らせた。ビクツとなった直後に今度はなにやら言い争いをしているような声が聴こえてきて、みほの震えはより一層大きくなる。

「みほ、やっぱり帰る？」

沙織が心配そうに、俯いた彼女の顔を覗きこむ。みほを挟むようにして反対側に立っている華も同様だ。しかし、フルフルと横に頭を振り、意を決したかのように顔をあげた。

「行きます。．．．きつとまた、私の為に怒ってくれてるから」

中にいるのは、大和で間違いない。声で判別できた。だからこそ自分が行かなくてはならないと、奮い立たせる。よし、と気合を入れてからドアをノック。入室を促す声が聴こえたのを確認してから中に入れば、案の定生徒会役員の三人の内、会長である角谷　杏が座っているデスクに手をつけて抗議していた大和の姿があった。

「来たか、西住。．．．その二人は呼んでいないが？」

睨む、と言つて差支えないような目つきで沙織と華を見るのは、片眼鏡をかけた広報の河嶋　桃で杏を挟んだ反対側に居るのは副会長の小山柚子だ。大和の気迫に圧されオロオロとする一方、桃は対照的に食って掛かっていたがみほが来たことで冷静さを取り戻す。しかし、それが大和の逆鱗に触れた。デスクに付いていた手が、今度はマイペースに干芋を頬張る杏の胸倉を掴んだ。グイッと引き寄せ、怒り心頭で睨む。

「デメエ．．．全部知つててコレか？」

「そうだよ」

あつげらかんと返答する杏。それがさらに大和の怒りを駆り立てる。

「ふざけんのも大概にしるよ。俺とみほはこの学校に戦車道がないの

を理由にここに来たんだ。それを・・・コイツの傷を抉るようなマネ、見過ごせるわけねえ」

「だろうね・・・だからこそその西住ちゃんだよ。たしかに悠木ちゃんの言う通り、経験者のきみ等がいてくれた方がウチらは大助かりなんだけどね？でもさ、それ絶対拒否するじゃん。だからこうしたんだよ。西住ちゃんをチラつかせれば、きみはこの話を吞まざるを得ない」

してやったり、と笑みを浮かべる杏。それに対し大和は額の青筋をさらに際立てるように怒りを表す。

「言う事きかなきや今度は人質ってわけか。随分といい性格してんなア先輩」

「こつちにもこつちの事情があるからね後輩。・・・それはそうと、戦車道選択したときみら退学にしちゃうからね」

ブチ。そんな音が聴こえた気がした瞬間、みほが沙織と華に握られていた手を解き、慌てて大和の背中に駆け寄った。

「大和君ダメッ！」

事の危険性を直感したみほにより、大和が一線を越えてしまうのをなんとか防ぐ。彼女の言葉によりある程度の冷静さを取り戻した彼は荒くなる息を徐々に抑え、胸臆を掴んでいた手を放す。

「・・・沙織さん、華さん。ここまで付き合ってもらってありがとう。大和君も・・・」

覚悟を、決めないといけない。

「・・・あの、」

私を支えてくれた人の為に。

「私——」

何より、自分を変える為に。

「・・・戦車道、やります！」

一步を、踏み出そう。



「……えっと」

気まずい。目の前の男は心底不機嫌ですと言うような態度でムスツとした顔をしながら座っている。その横では、みほが苦笑いを浮かべ、その様子にはさすがの華も困り顔でいる。沙織自身、この手のシチュエーション自体は漫画などで見た事はあるものの、実際に遭遇したのは初めてだ。その為、どうフォローなり対処なりしていいかわからず困惑してしまふ。現在、学校の帰り道にあるアイスショップに四人で立ち寄っている。店内の端の方のテーブルに腰掛けて紹介も兼ねて会話していたのだが、この状況である。

「……本当に良かったのか？」

そうみほに聴きながら、目線をテーブル上に置かれたカップの、その中身に目を落とす。コーヒーの水面がゆらゆらと揺れる。大和の問いかけに、みほは黙って頷いた。

「私、嬉しかったの。さっきの時もそうだけど……家を出る時も、大和君が怒ってくれて……それで、一緒に大洗に来てくれて。まあ、私がどんくさいっていうのもあるんだけど」

その話を聞いて、華は「あらあら」と口元に手を当てて小さく笑う。沙織はというと、目をキラキラさせながら大和を見て居た。その視線に苦手意識を持ちながらも、みほの言葉に返す。

「アレは師範のやり方が気に入らなかつただけだ。それに、俺としてもまほは……まあともかく、あの人は苦手だったからな。いい機会だった」

清々した、と一言付け加えて皮肉に笑う。

「改めて……大和君、ごめんね。私のせいで色々と……」

「おまえが謝ることはねえって言ったろ。気にすんな、俺が好きでやったことだから……んじや、俺はここらで失礼する。武部さん、五十鈴さん。みほの事……お願いします」

一言二人にそう告げてから、コーヒーのカップを持って席を立つ。去りゆく大和にまた明日と返しつつ、沙織と華はみほに問う。

「ねえねえ、二人はどういう関係なの!？」

「ど、どういうって?」

「恋仲か、ということですよ」

二人が嬉々とした表情で聞いてくる。何となく聞かれるんだろうなどは思っていたが、やはりどう答えていいかわからない。

「えっと……小さい時から一緒でね?戦車道もおんなじで……私が始めた頃には、大和君はもう『ナイトメア』の操縦をやったの」

「『ナイトメア』というのは、『ナイトメアフレーム』のことですよね?あの大きなロボットを、小さい頃からやっていたのですね?」

「うん。といっても、本格的に試合に出るようになったのは中学に入ってからだけど。私やお姉ちゃん指揮する時は、いつも騎士として乗ってくれるの。大和君凄いなだよ!操縦も上手いし、お母さんにも一歩も引かないで意見するし……それに比べたら私は、いつもドジで……」

話すみほを見て、なんとなくわかってきた彼女の心。少しとはいえ、彼の事を話す時だけは笑顔を浮かべるが戦車のこととなると途端に暗くなる。それだけを見るのであれば。

「みほってさ、大和君の事……」

言いかけて、やっぱりやめておこうと沙織は口をつぐんだ。不思議に思ったみほは首を傾げる。そんな彼女の口に、自分が食べていたアイスを半ば強制的に放り込んだ。それに便乗して、華も放り込む。

「……ありがとう」

二人の優しさに、思わず笑顔がこぼれた。



翌日。教室に行くと、自身の机の上には選択必修科目を選ぶ用紙が置いてあった。それを見て、朝からイライラを募らせる。

「おはようございます悠木殿！そういうえば、その紙を生徒会の人たちが置いて行きましたよ」

「あんのロリツインテール・・・ッ」

どこまで人の神経を逆なですれば気が済むんだ、あの女。そう愚痴を零しながらも、一番上にデカデカと書かれている戦車道の欄に丸を付ける。そっちがその気なら、こっちもやけだ。元々みほがやると決めた時点でやる気ではいたから、どのみちではあるが。それでも誘導

された気がして何だか納得がいかないのも事実。

「あ、悠木殿も戦車道を受講されるんですね！」

「もってことは、もしかして秋山さんも？」

「はい！私戦車大好きでして・・・でも、意外でした。悠木殿が戦車道を選択するとは思ってなかったのだから」

何故か嬉しそうに話す優花里。てっきり、「男が戦車道？」くらいは反応があるかなとは思ったが、意外にもそれはなかった。まあ、受講するだけであの破格の特典だ、受けても違和感はないと思っただろう。それに唯一戦車に対して免疫のある男子だ。彼女にとっては少しでも同じ話題を共有できる人間がいて嬉しいというものもあるのかもしれない。

「なんなら一緒に行くか？」

「いいんですかッ!？」

近い。そう言って距離を取る。

「これは、これはまたとないチャンス・・・！」

何やら不吉な笑みを浮かべているような気もするが、そこは敢えてスルーすることに決めた大和であった。

「ところで、悠木殿は戦車道を受講するということは、やっぱり「ナイトメアフレーム」に乗るんですよね？」

何故か期待を込めた目で見てくる優花里。厳密として、戦車道において男が戦車に乗るといいうのは長い歴史の中でも事例がない。その為戦車道は女性の競技というイメージが定着しており、全国戦車同連盟が公式に発行しているプロモーション動画でも、乙女の嗜みとしてナレーションされている。その為、男が関わるとなると裏方か、もしくは「ナイトメアフレーム」への騎乗以外ないということになる。しかしながら、大和もみほと同じ理由でこの大洗女子に来た。正直な事を言えばできれば関わりたくはないと思っっている。思っではいるものの、現状そういうわけにもいかなくなっている。

溜息を一つ。

「この学校にあればの話だがな。調べて見たら、もう20年以上も戦車道をやってないみたいだから、どこかに売り飛ばされてもおかしくない」

「ああ・・・だとすると、悠木殿は戦車の整備や修理にまわるんでしょうかね？」

「ま、なければの話だがな。そうでなくても、装備やら設備やらが整ってなければそうなるだろうし。午後にはわかるだろう」

そう言っって自分の席についた。



午後の授業、5限目。戦車があるという倉庫の前には生徒会含め21人の生徒が集まったが・・・。

「思ったより少ないな・・・」

周りの生徒達を見て、大和が呟く。一見多いように見える数字ではある。しかし一輻の戦車を運用するとなると最低でも3人からが必要となってくる。戦車道の大会、それも強豪ともなればこの倍では利かないことがある。人数が集まっても車輛が無ければ意味はないが、

それでも少ないよりはいい。

だがこれは・・・そう考えていた大和の後ろから、みほ達三人がやってくる。

「・・・いいのか？本当に」

何度目かの質問。くどいと言われようとなんだらうと、大和はみほの真意を確かめる為に言葉を口にした。

「まだ、正直恐いよ。でも、逃げない・・・逃げたくないの。私も、大和君みたいに強くなりたいから」

「・・・はあ。わかった、もうこの件に関しちや何もいわねーよ」
お手上げと両手をあげて降参と一言呟いた。

「あー、それではこれより戦車道の授業を開始する」

「あつ、あの、戦車はなんですか？ティーガーですか、それとも・・・あ、*“ナイトメアフレーム”*はこのものでしょうか!?日本製、それともイギリス製・・・」

矢継ぎ早に質問する優花里。もうワクワクが抑えきれないとばかりに手をあげて意気揚々とまくし立てるが、そんな彼女の後頭部に軽くチョップを入れることで宥める。

「悪い、続けてくれ」

「う、うむ・・・では、中に入ってくれ」

鉄製の扉が音を立てて開く。中は薄暗く、長い事使われていないのか少々埃っぽい。そんな空間に、ポツンと置いてある戦車。が一台。そしてその奥には・・・上からシートを被せられた大きな人型の鉄塊がある。

「何コレ・・・」

「ボロボロ」

「ありえない・・・」

「わびさびがあつていいと思いますよっ..」

それはどうなんだ、と言おうとして口を噤む。たしかに言う通り見た目は最悪の印象を受けるが、それも素人から見ればの話。

「みほ、どうだ?」

大和が戦車に歩み寄って行ったみほに問う。

「鉄さび・・・うん、これなら、なんとかいけそう」

確信を持った領きを見て、大和はその隣に鎮座している方へと向かう。覆っていたシートに手をかけ、思い切り引っ張るとバサツと落ちる。

「外部装甲は綺麗に剥がされてるな・・・会長」

振り返って手を出す。その意図に気が付いた袖子がスカートポケットから杏に機体の立ち上げに必要な起動キーを、大和に渡す。後方にまわり、片膝をついている方の足を伝って登りコクピットハッチを開ける。シートが排出されたのと形状を見る限り、イギリス製の物だ。『ナイトメアフレーム』には大きく分かれて二種類存在し、広く一般的に開発されているのが日本式。大きな特徴としては、コクピットのシートがバイクを操縦するような前のめりになる体勢になり、イギリス製は座る形になる。他にも計器やレーダーだったり細かい違いはあるが、基本的には素体となるものは同じで、あとは外部装甲で個性を出していくといった形になる。

しかし今、この機体には外部装甲も武装もない。

「システムは・・・生きてる。動かせることには動かせるが、これじゃ試合云々以前の問題だな」

カタカタとコンソールに手を走らせながらそう報告する。

「じゃ、じゃあなんだ、これは使えないってことか!？」

「現状は、な。装甲と武装だけを何とかすれば実践投入できないこともないが」

「そんなアテなんて・・・」

困ったようにオロオロする袖子と取り乱す桃。これにはさすがの杏も「うーん」と腕を組む。戦車道において、『ナイトメアフレーム』の有無は戦力差を大きく左右することがある。それだけに実戦投入できないのが悔やまれる。

が、そこで大和が再び大きく溜息をついて携帯を使いどこかに連絡し始めた。

「悠木君、何してるのかな?」

「大和君のご両親、『ナイトメアフレーム』の整備士をして。私の

お母さんとも仲がいいの」

「そうなんだ——へ？」

みほは西住流の師範、しかも時期家元の娘。その人物と仲がいいとなるとそれだけでもかなりの衝撃。その上“ナイトメアフレーム”の整備士ときた。

「・・・よかったの大和君？」

心配そうな顔で、降りてきた大和に歩み寄るみほ。

「おまえが腹を決めたんだ。だったら俺も、覚悟を決めるさ。使えるコネは最大限使う。それが例え、避けている相手でも・・・な」

ここから始めよう。もう一度、逃げていた事に向き合うために。そう意を改にし、大和は後方の機体を見上げた。

第二話　く戦車、乗ります！く

「ンで、どこを探す？」

戦車が足りない。戦車がなくては、いくら人員が居ても意味がない。だから探す。それはわかるが、この広い学園艦のどこを探せばいいと言うのだ。

「確か、〃ナイトメアフレーム〃の・・・えつと・・・」

「ファクトスファイアですね。超高性能レーダーって言えばわかりやすいかと」

「ありがとうございます。秋山さん」

華の疑問に答える優花里。大和がパイプとなりあつという間に打ち解ける事が出来た。それをチラリと見ながら、先頭を歩くみほに問う。

「とりあえず、山岳地帯かな。そこならあってもおかしくないし」

「ない方が、自然なんだがな」

皮肉を込めた言葉にみほが苦笑いする。そもそも戦車が学園艦内にあるという事自体確率が低い。この船・・・というより学校は、資金的にも苦勞していた時期があったらしい。それを乗り切る為、戦車と〃ナイトメアフレーム〃の装甲だけでなく武装まで売り払ったと会長は言っていた。ここに残っている、とは考えにくい。地図片手に探しに来たはいいものの、一体どこにあるのか・・・ただでさえ無謀な策な上に、さらにテンションが落ちてきた時。

「・・・花の香りに混じって、油の匂いがしますね」

クンクンと鼻を動かしながら華が言う。

「華道やってるとそんな事もできるようになるの!？」

「わたくしだけでもしませんけど・・・」

鼻を動かしながら、匂いが漂う方向へと歩いていく。何も手がかりがないよりは、今は彼女の嗅覚だけが頼りになる。なら、異見を唱える必要はないと後に続こうとした時だった。

「パンツァー・フォー!」

「パンツのアホお!？」

思わぬ号令と空耳に、思わず吹いてしまう。

「専門用語で、戦車前進って意味なの」

「ぱ、パンツのアホ・・・クッククク・・・！」

「わっ、笑わないでよオ！」

顔を真っ赤にしながら講義する沙織を後目に、奥へと進んでいく。すると、先に歩いて行った華の姿があり、その視線の先には油と鉄錆で汚れた戦車があった。

「戦車あった！」

「38t・・・」

「なんかさっきのよりちっちゃい。ビスだらけでぼつぼつしてるし」

難色を示す沙織とは逆に、優花里は対照的に心底嬉しそうにする。

それも、汚れた車体に頬ずりしてしまいう程に。

「そこがいいんですよ。38tといえば、ロンメル將軍の第七装甲手団でも主力を務め、初期のドイツ電撃戦を支えた重要な戦車なんです！」

「秋山さん、汚れてんぞ」

大和の声にハツとなり、我に返る。顔を赤くしながらあたふたして顔を俯かせてしまう。

「めっちゃ生き生きしてたよ」

「すみません・・・」

「俺が転校してきた時もそうだったな」

「そうなんですか？」

「ああ。自己紹介の後、HRが終わった途端に質問攻めにあつた」

その頃の彼女は、一言で表すなら犬だった。暫く帰ってこなかった主人が帰宅し懐いてきた、そんな感じだ。一体何をそんなに期待していたのやら。

「・・・まあ、その。なんだ。博識なもの、おまえのいいトコだと思うぞっ。」

「うわっ、こっちはこっちで不器用・・・」

「フォローにもなってますね」

そこまで言うか。ガツクリと項垂れる人間がまた一人。それを見

て苦笑するしかないみほであった。



学園艦内を調べた結果、発見できた車両は38t、IV号、八九式、III号突撃砲、M3中戦車の5輜となっている。

「戦車5輜、それにイギリス式の『ナイトメアフレーム』が一騎……しかも素体」

「装甲やら武装やはさつき母さんに型番連絡してきた……けど」
そこで言葉を切って機体に歩み寄り、そつと触れる。

「Z01b……Z01つて、ホントどこまで皮肉なのかねえ……」
型番をポツリと呟く大和。

「その型番つて……たしか——」

「『ランスロット』オ！」

大声をあげて、優花里が目を輝かせながら飛んできた。

「『ランスロット』と言えば、黒森峰女学園の大会9連覇を支えた超有名騎で、その白く気高い姿からかなりの人気を博しているんです！
そしてその騎士として乗っていたのが何を隠そう、悠木殿なんですツ
！」

まるで効果音でも聴こえてきそうな雰囲気醸し出しながら、それでいて讚えるような感じで声高々に説明する。それにみほはあわわと狼狽え、大和は頭を抱えて深く溜息をつく。それを見て自慢げな笑みから一変。やってしまったとまた顔を俯かせてしまった。

「うそ、悠木先輩つてそんなスゴイ人だったんだ……」

「てつきり目つきの悪い不良かと思つてた」

「オイ聴こえてんぞ一年」

遠慮なくデイスリにきた後輩達を邪けんに扱い、落ち込む優花里の元に歩み寄る。目に見えて落ち込んでおり、先ほどとは違い今度は泣きそうなまでに気が沈んでしまっているようだ。それを見て、どうしていいかわからず頭を掻く。手に負えない。これがみほなら……

そう考えた時に、ふと手が動いた。ポン、と頭の上に置かれる手。自分よりも大きな、けれども父よりも少しばかり小さい手。身内以外なら、おそらく初めて触れられた髪。癖毛であり好みじゃないけど、他に似合うような髪型があるわけでもない。

そんな頭に、初めて。しかも同年代の男の子の手。一瞬にして頭が真っ白になった。少し高いところから、彼の声が聴こえる。

「言ったら、そういう博識なところがおまえの良いトコだって。つい言いすぎちまうのは、その内治せればいい。でもその知識は、絶対に役に立つ時が来る。その時は、頼んだぜ。戦車博士」

そう言って数回ポンポンと叩いてから、機体のコクピットへと昇って行った。

「……あれ、絶対恥ずかしくて逃げたね」

「みほ、さつき秋山さんが言ってたのってホント？」

「う、うん。『ランスロット』は前の学校に居た時の大和君の乗騎で……最後の大会では、前の試合で不具合が生じたから修理の関係で別の機体に乗ってたんだけど」

うん、絶対中でやっちゃったってなってる。姿は見えないが、明らかに顔を真っ赤にして悶絶している大和の姿が想像できて、みほは小さく笑う。今日はなんだか、よく笑う日だ。



「港はどっちなかな？」

「あー、早く陸に上がりたいなあ。アウトレットで買い物もしたいし」汚れていた戦車の洗車を終え、後の事を自動車部に任せて下校。今は5人で寄り道しながら帰っている。

「……あのーちよつと行きたい場所があるんですが……」

「……遠慮せずに言えよ。行こうぜ」

未だに顔を見れない。そう気まずそうに大和が振り返らずに言う。

それから戦車ショップに移動し、店内を物色。中には制服や専門雑誌、マニアックなものに至っては車輪まである。

「戦車道も恋愛も一緒とはな・・・」

「沙織さんらしいといえばらしいよね」

苦笑する二人。そんな二人の視線は、ふと店内備え付けのテレビへと向けられている。夕方のこの時間はニュースのスポーツ特集が放送されており、そこには高校生大会でMVPを獲得したまほのインタビューが映っていた。それを見て、そして彼女の言葉を聞いてすっかり沈んでしまうみほ。

——逃げ出さない事。昨日、逃げないと決めたのに何故かこの言葉がまだ胸に刺さる。

「・・・みほ」

名前を呼ばれ、すこし心が軽くなる。

「そうだ、これからみほの家に行ってもいい？」

「え、私の家？」

「うん。ここから近いんでしょ？晩御飯作ってあげるからさ」

沙織の提案により、場所をみほの部屋に移す。彼女の指導の下、夕飯の準備を進める中、話は一度自室に戻った大和の事に。

「そーいえば、みほって悠木君とはどういう関係なの？」

「えっと・・・」

「やっぱ恋人とか？」

目をキラキラさせながら聞いてくる沙織。ぐつぐつと煮立つ鍋を優花里に任せ、みほに詰め寄る。コンタクトから眼鏡に変えた彼女はどこか知的な雰囲気を感じさせつつも、少し落ち着いた印象を受ける。

「ごっ、ごっこ恋人だなんて！私と大和君は、その・・・小さい頃からの幼馴染で。親同士が仲がいいのもあって、それで」

「確か、悠木殿のご両親は『ナイトメアフレーム』の整備を専門としてましたよね。以前雑誌で見た事あります」

「うん。お母さんが大和君のお母さんの後輩で。元々戦車道を受講してたって話も聞いたんだけど、その時の話をする、何故かお母さん

の顔が青ざめてたような・・・」

今でも思い出せる当時の母の顔。冷静沈着、それどころか冷徹ささえ感じていた母の顔が、まるで絶望したかのように青ざめていたのを。理由を聞いても何も答えてはくれず、煙に巻いていつも逃げ居ていた。

「あの西住師範代が・・・」

一体どんな人物だったんだと考える。・・・ダメだ、想像つかない。

「で！話は戻るけど、みほはどう思ってるの。彼の事」

「どう、って言われても・・・。いつも私の事を支えてくれて、守ってくれて・・・会長達に戦車道の勧誘の話を受けた時も」

「あー・・・あの時の悠木君、怖かったよね」

「わたくし、殿方の怒ったところを見たのは初めてでした」

「・・・そういえば、悠木殿は黒森峰に居た頃は“ランスロット”の騎士でしたから、よく西住まほ選手と一緒にいましたよね。噂では——」

言いかけたところで、来客を報せるチャイムが鳴った。「はーい！」とみほが応えると、鍵が開いているのを知っているのかドアが開いた。

「・・・なんで、」

「いつでも野営できるように」

「それで毎回ガサガサ鞆が揺れる度に音がしてたわけか・・・ってみほ、おまえまだ片付けてなかったのか？」

「あ、うん。ちよつと——」

「言い訳はいい。今度の休みに片付けるからな」

「うう・・・」

あ、これ恋人じゃなくて親子だわ。そう当人たちの関係を位置づけつつ、沙織は自身の作業に集中するのだった。それから30分後、食卓に料理が並べられる。中央には華が活けた一輪の花、それを中心に置かれているのだが・・・

「見事に茶色一色だな・・・辛うじて肉じゃがに色味があるくらいか」

わかつてはいたが体を動かした後に友達と作って食べるとなったらだいたいこうなる。しかし、そこは女子だ。何かしら彩りがあってもいいだろうというツツコミはこの際省く事にして、箸の行く先を肉じゃがへと向ける。沙織曰く、「自信作」らしい。箸でつまみ、口に入れ咀嚼。

「・・・うまいッ！」

「ホント!？」

「味付けが完璧だ・・・みほならまずこうはならない」

「わっ、私だって、できる・・・もん・・・」

できない。どう考えてもその結論にしか至らないのが悲しくてふてくされてしまう。そんなみほを隣でフォローを入れる優花里。

「こんなに家庭的なら、さぞモテるんだろうな」

「いやあそれほどでも・・・」

「沙織さん。それは皮肉ですか？」

「むっ・・・華って時々エグイよね」

その後もひたすら肉じゃがを頬張る大和。4人が会話に花を咲かせる間も一人黙々と食べている姿が気になり、沙織が話しかける。

「あの・・・悠木君、そんなに美味しい・・・？」

「美味しい。かなり美味しい。というか、ここのところ誰かの手料理なんて食った事なかったから余計に美味しい」

そんな大和の感想に気を良くしたのか沙織は少し頬を赤らめながら俯く。ここまで褒められるとは思ってなかったのもあるが、そもそもよく考えてみれば初めて異性に手料理を作った事に気が付き、より一層恥ずかしくなる。

「沙織さん」

「な、なに？」

「良かったですね。胃袋、掴みましたよ」

「・・・何だか複雑う・・・」

夕食を食べ終え、一通り後片付けも終わったところで時間的に解散となった。見送りの為、階段下まで降りて行き、三人の背中を見送る。最初は大和が送って行くと言い出したのだが、まださほど遅い時間で

もないし学園艦の中だからという理由でみほと一緒に見送ることになった。

「……ねえ、大和君」

3人が見えなくなつた後、みほがぽつりと呟く。

「私、ここに転校してきて良かった」

「……そっか」

「うん。……ありがとう。私を連れだしてくれて」

そう笑顔でいうみほ。それを見て急にそっぽを向いてしまう大和。先ほどの沙織程ではないが、頬を赤らめ指でぽりぽりと頬を搔く。

「あ、明日も学校あるんだし、早く寝るぞ」

「うん！」



「で、遅刻したのかおまえは」

「うう……それには訳があつて……」

翌朝、戦車道の授業で集まつた時に開口一番、みほが遅刻したことを華から聞いた大和はみほにそう責めた。

「大方サークルKでボコの新しいグッズ出たからソレ観て遅れたとかだろ?」

「え、そうなの?」

「え?」

「え?」

朝から何やってんだと苦笑いするのは優花里。その前で何やらしきりにブツブツ言っている沙織。どうやら未だに大和の顔をマトモに見れないらしく、顔をあげない。

そして、彼女が独り言を言っている理由がもう一つ。それは先ほど空から飛行機で飛んできて、戦車で降りてくるというパフォーマン

スで登場した、今回戦車道の教官をする事になった人物。蝶野亜美の存在だ。

「騙された・・・」

「いいではありませんか。素敵な方ですよ？」

いや、そうじゃなくて。そう言いたいのが、言う気力がない。再び項垂れる沙織。そんな中、ふと蝶野と目が合う。彼女もこちらに気が付いたようで「しまった」と表情を曇らせる大和。

「あら・・・西住師範のお嬢さんと、悠木さんのご子息の・・・」

蝶野が興味を示したことにより、全員の視線が2人に集中する。外部から、しかも自衛隊から名のある教官が来るとは聞いていてまさかとは思っていたが、本当に来てしまうとは予想外だった。

「師範にはお世話になってるんです。お姉さまも元氣？」

何気ない、本当に悪気なんて微塵もないただの世間話程度の内容。だがその質問も、今は鬱陶しいことこの上ない。言い淀むみほ。周りが少しざわつき始めた。

「悠木大和君、よね？」

「・・・ども」

「まほさんとは違う学校なのね。てつきり夫婦で同じ学校かと——」

「蝶野教官ッ！」

叫ぶ大和。だが、もう遅い。零れたワードはしつかりと他の生徒にも聴こえており、ちらほらとその事についての話し声が聴こえてくる。これにはさすがにマズいと思ったのか、蝶野本人も狼狽える。

「・・・その話は、親同士が勝手に決めたことです。それに今、俺もみほも西住の家には居ません。ですから、もう彼女とは関係ないです」

「そ、そう・・・でも意外だったわ。『死神』と謳われた貴方が『ランスロット』を降りるなんて」

「色々あるんですよ。色々」と

察してくれ。そう言わんばかりの視線を向ければ、沙織と優花里が話を逸らす為に手をあげ質問をする。その後一言二言会話をして、実践に移る。ただし大和は見学という形になった。各々が自身の担当

車輛に進む中、2人に向かって言う。

「ありがとう・・・助かった」

「いえいえ」

「友達だもん。当たり前でしょ」

笑顔でそう言う2人。いい友達を持ったな、みほは・・・。そう
思いつつ管制塔に行こうとすると、後ろから華が声をかけてくる。

「みほさんだけじゃ、ないですよ」

「そうそ！悠木君も・・・大和君も、もう友達だからね」

「・・・健闘を祈るよ」

振り返ってそう言い、大和はその場を後にした。

第三話　　練習試合、開始です！

乾いたドン、と響く音の直後、盛り上がった土の山が吹っ飛ぶ。その中央に建てられた的は見事に真ん中を貫通——どころか木端微塵に破壊してしまっている。その様を観て「やりすぎだろ」と呟いたのは、それを撃った白い鉄の騎馬に乗る大和だ。青い銃身から立ち込める硝煙と、それまでであったはずの的とを交互に見て絶句するメンバー。

「重戦車並・・・いや、比較になるかどうか・・・」

絶句しながらも言葉を口にする優花里。片膝をつき、構えていた銃を降ろして立ち上がる。それらの動作を一通り終えた後、コクピットが開いて降りてくる。

「これなら来週の練習試合もらくしよーだね」

呑気な声でそんな事を言いながら、いつも携帯している干芋を頬張る杏。なにも考えていないのか、今までの事を考えればそんなことはない筈だが。

そんな杏が昨日聖グロリアーナ女学院との練習試合があることを告げた。期限は一週間。それまでになんとか戦力の確保と人材育成をしなければならぬ。みほと大和、そして知識がある優花里以外は完全にド素人な為、操縦技術や用語の暗記だけでなくトラブルの対処法まで教えなければならぬことは山ほどある。しかし、知識がないからなのか、彼女らの吸収の速度は早かった。まだかなり粗削りではあるものの、良い腕をしているメンバーも何人かいる。これなら期待を持てる・・・筈。そこでネックになってくるのが「ナイトメアフレーム」の装甲と武装。さつき大和がやって見せたように威力は調整が必要、装甲は所々素体が見えている付け焼刃状態。そんなコンディションの中、練習試合に挑まなければならぬ。

「大和君、なんとかかなりそう?」

流石に不安になったのか沙織が小声で耳打ちする。みほも沙織同様、ほかのIV号乗車メンバーも同様の思いらしい。あまり感情を表に出さない麻子でさえ、その色が少しうかがえた。

「操縦技術だけでなんとかなるとは思えない。俺も、高いとは言えないからな。それだけに頼りになるのは剣だけと思っただい」

「流石の『死神』でもこれはお手上げですか・・・」
「だからその呼び名やめろって」

ともかく、現状は厳しいという事だけはわかる。いくら士気が高くても、それを生かす戦術があっても、戦力が心もとないのではカバーできるのにも限界がある。それを弱みとして相手に付け居られないよう、立ち回らなければならぬ。みほのプレッシャーは大きい。

「西住」

桃がみほに声をかける。

「この後、各車輛のリーダーを集めてのブリーフィングを行う。悠木、お前も来い」

「それでは、お二人とも。また後程」

問題を解決している時間など、残されてはいない。どのみち残りのパーツが間に合わないなら、せめて打てる手は打つべきだと頭を切り替え、生徒会室へと向かう。中ではすでに作戦内容が記されたホワイトボードがあった。テーブルを挟み、来客用の長めのソファに腰掛け、立案者である桃の説明を聞く。

「――以上が、今回の作戦だ」

桃が練った作戦は、こちらが囷を使い、敵をキルゾーンまで誘い込み一網打尽にするというものだった。相手の車両は装甲が厚い為、地形の高低差を利用して上から集中砲火を浴びせるといふもの。が、これに難色を示す。

「西住ちゃん」

言いたい事があるけど、言えない。転校してきて日が浅く、ましてや相手は一年先輩で生徒会役員。引つ込み思案のみほが進んで発言できるわけもなく、終始黙ってしまっていたがそこを見かねた杏がみほに促す。

「言いたいことがあるなら、はっきり言っただいよ？」

その言葉に小さく頷き、意を決して口を開く。

「敵はおそらく、こちらが囷を使ってくることを想定してると思いま

す。それを逆手に取られて逆包围されたら、手も足もでない……」
「私がたてた作戦に異議があるのか!? 文句があるなら貴様が隊長をやるッ！」

作戦会議とは。そんなことを問いただしたくなるような発言だが、みほが隊長になるという点に関してだけは、大和も賛成する。経験者で、西住流に明るいみほがやるのは適材適所といえた。だがやはり本人はためらいがあるようで、それを一端は否定する。

「俺も、みほが隊長になるのは賛成だ」

後押しするように隣に立っていた大和が言う。不安げに見上げてくる彼女に、心配するなど頭に手を置く。

「おまえが隊長なら、指揮も機能する。それに俺もその方がやりやすい」

「なら副隊長は悠木ちゃんにけつてーってことで」

いや、そこまでは……そう言いかけた時、みほが言う。

「わっ、私も賛成……」

満場一致、逃走経路なし。八方ふさがりでもはや受諾するしかない空気に溜息をついた。

「わかった……んで、戦車の方は河嶋先輩の案でいいとして、問題は『ナイトメア』の方だな」

「聖グロリアーナ女学院……私は戦ったことないんだけど、どんな機体なの?」

「えっと、日本製の『紅蓮』って機体みたいです」

タブレットの情報を読み上げる柚子から聴こえてきた名前に、大和は赤い機体を思い返す。

「正式名称、『紅蓮式』……俊敏性と火力に優れた機体だな。ってなるとローズヒップか」

「対戦したことあるの?」

「ああ。まあ、良くも悪くも真っ直ぐな奴だよ」

みほの質問に答え、大和はホワイトボードの前まで出る。そして描かれている作戦図にペンで丸く二つ記す。

「つか、河嶋先輩の作戦で『ナイトメア』の事、考えてないよね」

大和の指摘にグヌヌと唸る桃。それもそうだ、戦車道という競技名である以上、花形はあくまでも戦車。後発的に生まれた「ナイトメアフレーム」は、今でも色物として見られることも多い。維持コストも国から補助が出る戦車とは違い、未だにその体制は確立しきっていないとも言える。それだけに、こうして作戦の中に「ナイトメアフレーム」が存在しなかったり、最初から保有していないなどの事例は珍しくはない。数十年経った今でさえ、だ。

「別にアンタの作戦が気に食わないわけじゃないけどさ。戦力としてカウントしてくれないとショックなんだけど」

継ぎはぎみたくない外見だけどき、と嫌味を含んで付け加えるとみほからの視線を感じて目を向ける。頬を少し膨らませ、眉を逆ハの字で大和を見上げていた。

「大和君、言いすぎ」

珍しく怒ったな。そんな感想を抱きつつ嫌味を向けられた桃に再度視線を戻すと、半分涙目でグズグズと鼻をすすっていた。言い負かされた事が相当悔しかったようで、怒り半分の悔しさ半分といった感じに睨むような目つきで泣いている。

「女子を泣かすとは・・・」

「やっぱり不良」

「女の敵だッ！」

酷い言われようにたじろぐしかない大和。

「まあまあ。あ、言い忘れてたけど、負けたらアンコウ踊りだからねー」



それからほどなくして、試合当日。会場は茨城県は大洗の市街地となっている。戦車道の試合において市街地戦というのは珍しくはなく、山岳地帯などよりもより高度な連携と指揮能力も問われてくる難しい戦場になっている。ちなみに人的被害が出ぬよう徹底されてお

り、建造物への被害は国からの補助で修繕費を賄っている。つまりところ、「戦車がうちの店壊したぞラッキー新築できる」という訳で、むしろ当ててくれと思っている客も少なくはない。

閑話休題

試合会場内の閉鎖が完了すると、開始の挨拶をするために集合場所へと集まる。

「ねえねえ、なんでうちの『ナイトメア』はあんなローブみたいなのつけてるの？しかもフードまでついてるし」

「なんでも、サプライズなんだとさ」

ふーんと沙織が言ったところで相手の隊長が戦車から降りてくる。クリーム色の髪を後ろで括り、歩く姿はまさに優雅。赤いパンツァージャケットがさながら兵隊のようにも見える。そしてその中に混じって、全身赤で統一された衣装で現れたのは、聖グロリアーナ女学院の所有する機体『紅蓮式』に騎乗する騎士。堂々としたその立ち姿は横に並ぶ隊長であるダージリンとは真逆の印象も受ける。そんな彼女が、大和を見て口を開いた。

「死神……！」

「……ハア。はいはい、死神さんですよー」

「今日こそは負けないわよ!？」

「ハイハイ、オタガイガンバリマショーナー」

何故片言。まるで相手にする気がない大和に、さながら威嚇する犬が如く咆えるローズヒップ。そんな彼女をダージリンが宥め、今度はダージリンが大和を見据える。

「確か、戦車道から離れたとお聞きしましたが？」

「色々あってな。今は大洗女学園で騎士をやってる」

「なるほど……噂は本当でしたのね」

そういうダージリンの表情からは、「残念」といった感じが窺える。スカウトでもする気だったのだろうか。

しかしどのみち戦車道を離れた大和にとって、みほが普通的女子高生として過ごせない環境ならば行く気はない。西住の家から……黒森峰から去ると言い切った時からそう決めていた。そして二人が

黒森峰から転校したという話は瞬く間に他校に広がり、あずかり知らぬところで引き抜きの話も少なからずあった。聖グロリアーナもその一つである。戦車道界限において、西住の名前はかなりのブランドを誇る。そこにかの「死神」がついてくるとなれば「ナイトメア」保有の学校にとっては、鴨がネギを背負っているようなものだ。

だからこそ、のダージリンの反応である。蓋を開けて見たら、まったくの無名校にいた。しかも、戦車道の復活させたばかりの。

「まあいいですわ。・・・たとえ相手が無名の学校だとしても、手加減はしません。騎士道精神でお相手しますわ」

宣戦布告。それを受け、挨拶を済ませた後は所定の位置まで移動する。

『それではこれより、大洗女子学園と聖グロリアーナ女学院の練習試合を開始します。試合、開始ッ！』

第四話　　く激しい戦いです！く

試合開始から約20分。審判の合図からそれぐらいの時間が経った頃、試合が動きを見せた。一定の距離から離れて様子を窺っていた大和はインカム越しのみほの声によりその報せを受ける。

《こちらAチーム、敵を誘い込みます。皆さんは作戦通り、配置についてください。大和君、準備はいい？》

「ああ。『紅蓮』の位置も把握した。支援砲撃を開始する」

機体を操作して膝をつかせる。ライフルを天に向かって構え、スコープを覗きこむような動作をすれば、メインモニターが狙撃モードへと切り替わる。走行する敵戦車との距離を計算し、引き金を引いた。直後、反動で機体がほんのわずかに揺れたのを感じれば、その数秒後にIV号の通信手である沙織から連絡が入る。

《相手チームに牽制成功！グロリアーナの動き、ちよつと鈍くなったよ》

「今のでこつちの位置も知れた。移動する」

機体を立ち上げらせ、狙撃体勢を解いてランドスピナーを降ろし走行する。K M F戦において先に援護射撃をすれば、位置が確実にバレてしまう。その為戦車をこちらに割かれた場合、いざという時に援護に参加できないどころか最悪の場合撃墜すらありうる。こうして移動しなければならぬが。

『見つけたわよ、悠木大和！』

機体に備わっているスピーカーから聴こえる声に、さながら呼応したかのようにレーダーが『紅蓮式』の反応を捉える。

「もう来たのか・・・人気者は辛いなっ」

掲げた左腕からばら撒かれるかの如く撃たれる弾丸を躲しながら、林の中を疾走する。

左腕に装備されているマシンガンから弾丸をバラまき、こちらに攻撃してくる。命中精度こそないが、そもそも彼女の機体は機動力を生かした近接戦闘にある。近づかれたら、装備どころか装甲すらままならない今のコンディションでは一撃で落とされてしまう。遭遇戦は

一番避けたかったが、こうなつてしまった以上避けては通れない。故に、今できることはなるべく彼女を本隊から引き離すことだと大和は深くフットペダルを踏み込む。

機体が加速度を増し、装甲が付いていない分の機体重量の軽さを生かして速く走る。生い茂る木々を躲しながら、後方を確認しつつ距離を離す。

《待ちなさい悠木大和！このワタクシとお勝負なさいッ》

相変わらずぎこちないお嬢様言葉で、機体のスピーカー越しに挑発してくるローズヒップ。

「だったら追いついてみろよ。『紅蓮』の機動性はそんなもんじゃないだろ!？」

《そんなこと、重々しよーちしてますわよ!》

これでいい。あとはみほ達が作戦通り、相手のフラッグ車を討ち取れば試合が終わる。

終わる——筈だった。

ガクン、と突如揺れる機体。一瞬コクピットモニターにノイズが走ったかと思つたら、赤く点滅するコックピット。機体でのトラブルを報せるアラートが鳴り響く中、目線を前とモニターを行ったり来たり。フットペダルは踏み込んでいる筈なのに、速度が上がらない事に焦りを覚えるも、冷静さを手放すまいと必死に操縦桿を握りしめ、思考を巡らせる。その結果、導き出された結論は。

「ランドスピナーのケーブル破損!？」

表示された内容に舌うちしつつも、何とか相手を振り切ろうと機体を駆る。無理もない、付け焼刃の整備ならこんなものだ。寧ろ彼女達——自動車部は非常に良くやってくれたといえよう。慣れない整備に機材、そして極端に短い期間。それでここまで動けるように仕上げたんだ。それだけでももの凄い整備の腕前だと大和は内心で感心する。ここからは、自分の腕前次第だ。押し掛かるプレッシャーを操縦桿を強く握ることで耐え、機体を捌く。スピナーを収納し、反転して『紅蓮』と向き合う。その行動を見たローズヒップはニヤリと口角を上げた。

「とうとう観念しましたわね悠木大和！ここで討ち取れば！」

右腕に司令を送る。操縦桿に備わっているコントロールボールを操作し、武装の展開を促しスピードを上げる。鋭く大きな爪のある腕、その掌を相手に向かって突き出した。バチバチと電流が走る。〃紅蓮式〃最大の火力を誇る輻射波動機甲は、特殊装備の備わった右腕に高圧の電力を流し、触れたものを強制的に機能停止させ使い物にならなくしてしまう代物で、翳めただけでもKMFの機能を低下させるには充分すぎる。今の大和が駆る機体の昨日は本来の70%にも満たない。直撃はおろか翳めでもしたら・・・。

(勝負は一瞬・・・——ここッ！)

こちらも右腕のスラッシュハーケンの切っ先を展開させ突進。体勢を低くし、駆け抜ける。狙いは、〃紅蓮〃の細い腰部分。その関節。しかし大和の狙いは、ここでも狂わせられてしまう。

「それはお見通し、ですわッ！」

眼前にまで迫った相手が急にターンする。それによりコースから外れ、体勢の崩された大和は正面から地面を這いつくばる形に倒れてしまう。動かなくなる機体。それを見たローズヒップは心底残念そうな顔で倒れた相手を見下ろしたあと、言葉を発することもなくその場から離れた。



ザワリ、と。悪寒が背中を伝うのを感じてみほは一瞬目を見開いた後、すぐさま集中していた意識を引き戻す。現在、残存車両はこのIV号のみとなりグロリアーナの有する〃チャーチル歩兵戦車Mk・VII〃、そして〃マチルダII歩兵戦車Mk・III〃とVIにより奮闘するも徐々に追い詰められている。練度の低さもあり、さらに相手は全国大会で準優勝の実績もあるチーム。たった一輦で、ここまで立ち回れているだけでもかなりのものだろう。それだけ西住みほの存在が大きい

ということの現れでもある。

が、凄いのはないにも彼女だけというわけではない。ここまでほぼ無傷に近い被弾で済んでいるのは、ひとえに同じ車輛に乗り込んでいるこの仲間たちのおかげだろう。秋山優香里、五十鈴華、武部沙織、そして冷泉麻子。彼女らの活躍があつてこそ、今みほは戦車に乗って指揮を取れる。トラウマを抱え、戦車と関わらないとさえ誓っていた筈の思いを抑えながらも、だ。ただ・・・そう、ただ一点。その一点が、彼女の不安をかき立てていく。後方を見れば、遠くからでもわかる真紅の巨人。右手の大きな爪は、獲物を狩る狩人が如く鋭く光る。戦車道のルールによりこちらに対して直接的な手出しはないものの、その存在は脅威に他ならない。

「後方に、紅蓮式式」・・・」

「紅蓮」がいるってことは、まさか悠木殿が!？」

「やられちゃったってこと!？」

みほの眩きに優香里が最悪の事態を告げ、沙織がそれに便乗してしまふ。落ち着け、まだそうと決まった訳じゃないとみほは固く握った手を、もう片方のカタカタと震える手で抑えながら自分に言い聞かせる。撃墜のコールは本部からされていらない。となれば、動けない状況にあるか、相手を撒いてどこかに身を潜めているかの二択。

しかしそんなみほの憶測を打ち破るかのように、麻子が言った。

「やられてないなら、この状況で援護がないのはおかしい。つまりもう、アイツはやられてるって考えた方がいいかもな」

無情とまで言える彼女の言葉に、一番否定したかった可能性を考えなければならなくなったみほは、今まで支えにしてきた物を崩され不安に押しつぶされようとしていた。そんな中、ついに退路は行き止まりという形で絶たれてしまう。停止する車輛。後方には、敵戦車7輛にKMFが。条件を満たしたことにより、車輛と機体の距離はほど近いものになっている。戦車道において、KMFが本隊と接触できるのは両チームのバランスが極端に崩れた場合のみに限る。しかしそれは有利不利に関わらず適応されてしまう為、このように圧倒的不利な状況に立たされることも珍しくはない。

《どう足掻こうとも、これでおしまいですわ!》

ローズヒップの勝ち誇った声がオープンチャンネルのスピーカーから聴こえてくる。通信制限の設けられている公式試合ではない為、普段なら嗜めるダーズリンだが、今回はあの「死神」と謳われた悠木大和を抑えての合流を果たした彼女に免じて、それはしない。グロリアーナの戦いは常に優雅。それを体現するかのよう、彼女は紅茶を一口口に運んだ。

「・・・チエック」

「これで、おしまいなのでしょうか・・・」

「・・・大和君・・・!」

諦めかけた華の声に、みほは思わず口にする。一緒に家から出て、ここまで付き添ってくれた少年の名前を。絶体絶命な状況の中、相手の砲身がこちらに向いた・・・その時。「紅蓮式」のコクピットに、警報が鳴り響いた。ハツとなってレーダーに目を向けるローズヒップだが、その画面上に浮かび上がる光点の位置をダーズリンに報告する前に、それが目の前に現れた。放たれた砲弾を握りしめた剣で払い、一刀両断して落とす。その衝撃で、今まで撒かれていた布が風に攫われて飛んだ。その中から現れる、額から吐出した角。全体的に白一色で統一され、所々見える素体の部分から受けられる印象は無機質。しかしその外見から連想される姿はまさに、あるものは待ち望み、あるものは恐怖すら覚えた存在だ。

《みほ・・・悪い、遅くなった》

通信機から聴こえてくる声に、今まで重くのしかかっていた圧が嘘のように晴れるのを感じた。フツと軽くなる心に若干の戸惑いを覚えつつも、根底から湧き上がる歓喜を抑える事はせずに彼女は名前を呼んだ。

「大和君!」

来てくれた。護ってくれた。目の前に立つ巨人の背中に、この上ない安心感と温かさを感じてみほは前のめりにそう叫んだ。

「『ランスロット』・・・!?そんな、アレは黒森峰所有の筈です!」

取り乱すオレンジペコに、努めてアツサムが冷静に返す。

「いえ、あれは正確には『ランスロット』の予備素体でくみ上げられたもの……いわば、量産機に近いものですね。型番も違います」

「でも、あの姿はまさにあの白騎士そのものよ。……油断したわ」

撃墜判定が出ていない。ローズヒップから倒したとの報告もうけていない。その二つから考えるべきだった懸念を抱かなかった自分の采配ミスだとダージリンは目の前の脅威を見据える。

《ローズヒップは俺が抑える。みほ……勝て、なんて言わない。無理すんなよ》

「うん。……大丈夫。もう、大丈夫」

深く息を吸い、吐いてからしつかりと前を見る。やれる。そう思わせてくれる仲間がいる。やれる。勇気をくれた人がいる。それだけで、西住みほは戦えるのだ。

「ローズヒップ！」

《おまかせくださいませダージリン様！》

『紅蓮』が動く。いち早く反応した大和は目にもとまらぬ速さで機体を駆り、突っ込んできた相手と取っ組み合いをしながらも押し返す。それによって開かれた隙間を縫うようにして、麻子は操縦桿を操作して車輻を走らせた。ダージリンが残存車輻を引き連れ、逃げるみほを追いかけて行くのをちらりと確認しつつ大和はローズヒップを組んでいた体勢から蹴り飛ばして距離を置いた。

そこから、静かににらみ合う両機。どちらから出る事もなく重い静寂が続く中、遠くの方で響く轟音、爆発音。それが味方のものか敵のものかなんて判別すらかないほどに、二人は意識を集中させる。そして……白と紅は、激突した。

第五話 　く抽選会です！く

傷ついた車輛がレッカーで運ばれていく。ある者は、それを誇らしげに。またある者は、この後に待ち受けているであろう惨劇に顔色を悪くして片をを落としながら、その光景を見ていた。敗北。その二文字がみほの脳裏を過る。思わず強張ってしまう肩だが、もうここは西住の家ではない。熊本の、黒森峰じゃない。大洗だ。大洗女子高だ。そう言い聞かせてみるも、やはり一度植え付けられてしまった負の感情という物は抜けてくれない。

でも、この手があるから平気。

優しく撫でる手。その温かさと存在が、暗い水の底から引き出してくれる。でも。

「大和君、その・・・撫でてくれるのは嬉しいんだけど、恥ずかしいっというか・・・」

「まあ、みほだから」

それでいいの？と視線を向ける華と沙織。たしかに犬っぽいというか、小動物っぽいところはあるが。しかし抗議の言葉は口にするものの、甘んじて受け入れているところを見ると満更でもないらしい。なんだかんだで照れ笑いを浮かべてるみほに癒しをもらいつつ、これまでの疲れを取る沙織と華。

そこへ、意外な訪問者が現れる。

「貴女が隊長さん？」

背筋をピンと伸ばし、赤い制服に身を包んだ姿はまさに優雅。風貌も相まって、本物のイギリス淑女にも見える。流石、と大和は内心で零した。・・・約一名を除いては。

「・・・フフン」

勝ち誇った顔で鼻で大和を笑うローズヒップ。二人の戦闘の結果は・・・大和の敗北。そして、大洗女子の敗北。『死神』と戦い勝利したということが彼女の自信に繋がったことで、ただでさえ調子に乗りやすい性格がさらに調子に乗ってしまったようだ。顎を少し上げ、見下すが如く大和を見る。

「およしなさいな、ローズヒップ」

ぴしやりとダージリンにたしなめられる。それにしゅんとなる姿を見てデジャブを感じる三人。

「ごめんなさいね。この子も嬉しいのよ。なんせ、あの『死神』に勝てたんですもの」

「・・・喧嘩売ってんのか」

「そう思ったってことは、貴方が勝手に負けと認めたということよ。・・・さて、自己紹介がまだだったわね。私はダージリン。貴女は？」

「西住・・・みほ、です・・・」

今にも消えそうなくらいの小声で名前を言うみほ。そしてバツが悪そうにそっぽを向く大和に、大体の察しをつける。戦車道を嗜む人間で、西住の名を知らないなどありえない。全国にその名を轟かせ、日本一の称号を不動のものにしてきたあの『西住流』の令嬢。黒森峰では姉であるまほの方が印象に残ってしまうが、それでもみほの事を知っている人間は少なくはない。だからこそ、ダージリンは察した。戦車道無名校に、西住みほと悠木大和が居る。これだけで、何かあったという事は理解できた。だからそれ以上の事は何も言わず、ただ一言「なるほど」と呟く。

「・・・それでは、ごきげんよう。また試合できる時を楽しみにしていますわ。・・・あ、そうそう」

立ち去ろうとした時、ダージリンが足を止めた。

「あの隠し玉には驚いたわ」

「あの隠し玉って、私達何かしたっけ？」

「『ランスロット』の事ですよきつと。系統が似たKMFは少なくなりますが、あそこまで似通ったモデルはそうそう出回るものではありませんからね」

沙織の疑問に優香里が同じく小声で返す。

「いいサプライズだったろ？」

皮肉を込めて言った言葉にダージリンは小さく笑う。

「そうね。次はどんなサプライズをしてくれるのか楽しみだわ・・・」

それじゃ、ごきげんよう」



——では、やってもらおうか。アンコウ踊り。

その言葉通りに執行されたアンコウ踊りは、予想もしないチーム全員での罰ゲームとなった。会長の杏曰く連帯責任ということらしい。ピンクの全身タイツ、それもピッチリとしたデザインの為着れば当然スタイルもくつきりと出てしまう。しかしそんな年頃の花も恥じらう戦車道乙女達の姿よりも、そのあまりの可笑しさに耐え切れず、一人大笑いする大和。男がやっても面白くないという杏の独断と偏見により難を逃れてはいたものの、その後彼女らの買い物に付き合い荷物持ちとしてこき使われてしまうのは、当然のことだった。

大洗でも一番大きなショッピングモール。学園艦の着港している港も近くということもあり、今はかなりの人で賑わっている。両手いっぱい荷物を抱えながら、前を行く四人の少し後ろを歩く。ちなみに麻子は個人的な用事があるとのことでの場にはいない。

「いやあかついつい買いすぎちゃったね」

「お腹もすきましたし、どこかで食べていきましょうか」

まだ歩くのか。いい加減プルプルと震えてきた腕で荷物を持ちつつ抗議の視線を前を歩く四人に視線を向けると、その先にはショッピングモールを行き交う人の中でひと際目立つ人力車が一台。こちらを見たかと思うと、それを引いていた男が微笑みかけて歩み寄ってくる。顔は所謂濃ゆい系の、一昔前の男前な比較的整った顔立ち。背も高く、がっしりとしている。そんな人が、頬笑みかけて寄ってくる。そんな状況で、この少女が反応しないわけがなかった。優華理の肩をバシバシと叩きながらキャーキャーと黄色い声に妄想を乗せて一人もだえる彼女。しかし現実というのは非常なもので。そんな沙織などまるで眼中にないかのように素通りして向かったのは・・・華だっ

た。それにがっかりすると同時になんだか納得してしまうのが悔しいのか、ぐぬぬとなる。

だが、発せられた言葉は予想もしないものだった。

「大洗に来てたんですね、お嬢」

「新三郎・・・」

笑みを浮かべる新三郎に対し、何故かリアクションが悪い華が対照的に映る。その視線は目の前の男を見つつも、その真の視線は奥に座している人物に向けられていた。客席を覆うかのように展開されている屋根、そこから顔をのぞかせるのは、どこか華を思わせるような顔立ちの女性。薄紫の着物に身を包み長いであろう後ろ髪を団子にまとめたその姿はまるで花の牡丹のよう。その整った顔に笑みを浮かべ華に歩み寄る。そんな姿をみて華が「お母様」と言った事でこの人が母親何だと知るも、普段は学園艦で暮らしている身。そうそう家族に頻繁に会えるという距離ではない為、もう少し和やかなムードになると思ったがそうではない。どちらかというところ、歓迎していないといった印象を大和は受けた。そこから感じ取った事は、どこか経験のあるようにも思える。

「元氣そうね華。そちらの方々は？」

「同じクラスの武部沙織さんと西住みほさん。それから——」

「隣のクラスの秋山優香里と悠木大和ど——です。みんな戦車道を受講しています」

戦車道。その言葉に先ほどとはうって変わって真逆の顔になったのを見て、大和は感じていた既視感の正体に気づいた。

ああ、この人も同類か、と。

華に詰め寄ったかと思えば、いきなり手を取って鼻をクンクンと動かす。

「石鹸の匂いに混ぜてかすかに油の香り・・・貴女まさか戦車道を？」

いや今そう言ったじゃん。そんな言葉を飲み込む大和。

「私、もしかして何かマズいことを言ってしまったんでしょうか・・・地雷を踏んだと思った優香里があわわと震えだす。もしかしなくてもそうだと直感したのは、華の母である百合が軽くヒステリックを

起こして倒れた後の事だった。



五十鈴家は、代々華道の銘家として続いてきた家柄だ。戦車道で西住流と島田流の二大流派が有名なように、華道では五十鈴流と言えればそれは常識としてとらえられるほどの有所正しきもの。そんな家の一人娘として生まれたのが華であり、百合は娘の華に五十鈴流としての技と極意を教えてきた。展覧会などがあれば必ず賞を取るほどに彼女は成長し、五十鈴家の子として立派になったと言えるのだろう。少なくとも百合は華に対してはそう思っていた。華こそ、五十鈴の名を背負って立つに相応しいと。

そう、思っていた。しかしそれが戦車道によって変わってしまった。よりにもよって、一番毛嫌いしてる分野のものに。

「どこの世界、家にもめんどくさい大人っているもんだな・・・」

襖の隙間から対峙する母と娘を見ながら、大和が小声でつぶやく。「こら大和君、失礼でしょ?」

沙織に窘められつつ聞き耳を立てる。会話の内容はそれは酷いものだった。やれ野蛮だの、戦車なんぞ鉄くずになってしまえだの会話という会話をしようとはしないで、ただひたすら戦車道を否定する。

「アレでもか?」

「ギルティですね」

許す余地なしと言い切る優香里に苦笑するみほ。もうかれこれ30分は過ぎたであろうこの不毛な会話だったが、そこで華は百合に戦車道をやめるよう告げられる。そこは貴女の場所ではないと。本当の貴女ではないと。そう、否定されながら。それを見守っていたみほの顔がどんどん暗い物に変わる。おそらくは自分と重なる部分があったのだろう。彼女がどうしてそうなったかを知る二人のチーム

メイトとしては、これ以上はやめておいた方がいいと思ひ別室へと戻るよう促した。

その時。

「・・・わかりました。だったらもう、うちの敷居は跨がないでちょうだい」

「奥様それはッ！」

「新三郎はおだまり！」

ぴしやりと反論しようとした新三郎を遮る百合。険しい表情で見つめてくる彼女より告げられたのは、事実上の絶縁。それは17歳という若い歳の女の子にはあまりにも重すぎる言葉だった。それを見た大和の目に、数ヶ月前の光景が重なる。直後、聴こえるか聴こえないかほどの声で沙織に言う。

「ごめん、武部さん」

言われた沙織は辛うじて聞き取れたものの、その意味がわからず立ち上がった大和が襖を勢いよく開けるまで何もできなかった。だからこそ、彼は止まらない。ズカズカと中へ入って行き、華の隣に立つ。静かに百合を見下ろす彼の目は、怒りを表すように鋭くなる。

「・・・貴方は？」

「・・・華さんと同じ戦車道を受講している、悠木大和です」

「大洗は女子高でしょう？どうして男子の貴方が——」

「そんな事はどうでもいい。・・・貴女は、ご自分の娘がやりたいと言った事を否定するのですか？」

視線はそのままに、ただ言葉に気持ちだけを込める。そんな大和の後ろ姿を見てみほは不安に両手を握った。また、彼は立っている。誰かの為に、大切なものを必死に守ろうとする人の為に。

怯えて、全てから逃げてしまう人の為に。

「貴方には関係のない事です。部外者は口を挟まないで頂戴」

「俺は五十鈴さんの・・・華さんのチームメイトです。仲間が困っているなら、助けるのに理由はいらなんでしょう。それに、貴女は彼女の居場所をここではないと言い切った。だったら、もうここにいる必要はないでしょう？」

問われた言葉にさらに眉を顰める百合は、大和に手をひかれている華に視線を移す。それを受けた彼女は一瞬のためらいこそ見せたものの、直ぐに表情が変わったのを見て百合の表情はさらに険しいものになる。今まで自分の言う事に異議を唱えることはなかった華が：娘が、初めて反抗的な態度を取った。驚きと憤りが入り混じった視線を目の前の二人に向けつつ、百合は大和の言葉に反論しようと口を開く。

「行きましょう」

百合よりも先にそう切り出したのは華だった。少し目を伏せるように視線を落としながらそう言う彼女の表情は何処か哀し気で、苦しさを感ずれる程に沈んでいるのが窺える。行きましょう、その一言で大和は察したように踵を返す。背後で百合の言い淀んだ息遣いを感じつつ、新三郎が静かに正座している隣の襖に手をかける。

「お嬢……」

ようやく絞り出したであろうその声は、涙でかすれているのがわかる。

「顔をあげなさい新三郎。これは門出……新しい一歩よ」

そう言う華の表情は、先ほどとは違い穏やかで。普段仲間たちと他愛のない会話をしている時の、いつもと変わらない穏やかで優しそうな顔だ。声色も表情と同じで、それを受けた新三郎は堪えるように声を押し殺して涙を堪えつつ、部屋から出て行く二人を頭を下げて見送った。

「……さ、行きましょうか」

少しの寂しさをその瞳に映しつつも、華は笑ってそう言った。



大洗での練習試合を終え、日も暮れた頃に定期便は貨物や人を乗せ

て学園艦へと戻って行く。夜風に当たりつつも、鼻孔を抜ける潮の香りがなんとも心地いい。少し火照った心を冷やすにはちよいどいいと、大和はフェンスに肘を預けてもたれかかる。

「ここにいたんだ」

振り向かなくともわかる声に、大和は軽く後ろを振り返る。

「ちよつと頭を冷やしてた。流石にやりすぎた・・・」

後悔しているのか、溜息をつきながらそうみほに返す。彼女も歩いてきて隣に並び、海を眺める。苦笑いを浮かべつつ、みほは言う。

「でも、華さん感謝してたよ？ありがとうって」

「・・・俺礼を言われるような事してないけど」

「それは大和君がそう思ってるだけだよ。・・・私には、わかるの。華さんの気持ち。だから・・・うん。嬉しかったんじゃないかな」

再び「そうか？」と今度は長めの溜息と落胆。ガクツと項垂れる姿にどう返していいものかと悩んでいると、今度は何処か緊張しているのか裏返ったような声で「あの！」と声をかけられた。そちらの方を向けば、意外にも澤 梓を車長としていた一年生組だった。こちらが上級生だからなのか、それとも単純に大和にビビっているのか。丸メガネの大野あやと、普段では活発な少女の操縦手である坂口桂利奈の二人は彼女の後ろに半ば隠れるようにしてこちらを見ている。

「今日の試合では・・・すみませんでした！」

梓の謝罪とともに一斉に頭を下げた。と思えば、今度は顔をあげれば先ほどとは打って変わってキラキラとした瞳でまくしたてるように喋る。

「先輩方の勇姿、とても感動しました！」

「悠木先輩もなんだかんだでかっこよかったです！」

「一言余計だったの後輩」

通信手の宇津木優季が軽く大和を煽ったところで、遅れて沙織、華、優香里と麻子の四号車輛の面々がやってきた。

「この子たちがね、どうしても謝りたいからって」

「許してやれゆーき。暴力はいかんぞ」

「どうして俺はそうバイオレンスに見えるんだ・・・まあいい。敵前逃

亡は何も悪い事じゃーない。練習したとはいえ、今回が初実戦だったからな。けど、砲弾が飛び交うような中で車輛の外に出るってのはかなり危険な行為だ。いくら競技用の弾丸とはいえ、タダじゃ済まない。それはわかってるな?」

フェンスから離れ、真面目に一年生達に説教する大和。それがなんだかおかしくて、みほはバレないよう小さく笑う。

「はい・・・」

「わかればよし。・・・んで、これからどうする?」

「私達、みんなで話し合っただんです。それで——」

「戦車道、続けます!」

「どうしたら上手くなれますか!」

「強くなる秘訣は!」

「盗んだバイクで走りだしたりしますか!」

「おい待て最後なんだ」

あつという間に打ち解けていく姿を見て、良かったと顔を見合わせる四人。このままやめてしまうのではないかとヒヤヒヤしていたが、どうやらそれは気にしすぎだったらしい。

「あ、ここにいた」

「探したぞ西住、悠木」

船内へと続く階段から姿を現したのは生徒会の三人。会長の杏を挟み左に控える柚の手には何やら木箱のような物が抱かれているのが見える。なんだろうと首を傾げるみほ達に対し、大和は心底うんざりしたような顔でそれを見る。

「うわっ、いかにもイヤソーな顔」

「箱からしてわかる。小山先輩、コレダージリンからでしょ」

「凄い、どうしてわかったの?」

「俺ももらった事あるんすよ・・・」

柚から受け取った箱を開けるみほ。中にはカップが二つと手紙が入っていた。

「・・・えっと」

日本語で書かれていない為読めないで首を傾げるみほ。その横か

ら優香里が顔を出す。

「聖グロリアーナは好敵手と認めた相手には、ティーセットを贈るそうですね！これは英語で・・・えつと・・・うわぁ・・・」

書かれている文章を読み解いた優香里はその内容に苦虫をかみしめたような顔でそう零す。

「なんて書いてあるの？」

「・・・素敵なサプライズをありがとう。どうせ下を向くなら紅茶でも淹れてはいかが？・・・って書いてある。ちなみに上の文章は西住さんに宛てたもので、いたって普通だな。ま、あのお嬢様らしい」

麻子が淡々と読み上げる横で沙織が感嘆の声を出す。遅刻や居眠りは多い彼女だが、成績だけを見れば学園の中でトップを誇る。英語を翻訳する程度は朝飯前だろう。だがそんな麻子の口調とは真逆な男がここに一人。

「あんの紅茶バカ・・・ッ！」

「なんだかワナワナしてますね」

「聖グロリアーナは悠木殿の“ランスロット”には苦汁を飲まされつづけてましたからね。公式戦でもそれ以外でも、確か白星はなかったはずですから」

「勝ったってより、機体が動かなくなって自滅した感はあるけどねー」

さらにトドメを屈託のない顔とテンションで桂利奈が刺す。これには流石に応えたようで小さな声で「うっ」と漏らした。

「まあまあ、そう気を落とさなさんなって」

「そうだよ悠木君。まだ全国大会もあるから、そこで挽回すれば大丈夫！」

「そうだよ大和君！全国大会だってあるんだもん！まだまだこれから・・・はあい？」

そんな沙織の声が夕闇に溶けて行った。



一難去つてまた一難。杏から切り出された大洗女子学園の全国大会への出場決定という報せ。これで終わるはずがないと薄々は考えていた大和だったが、彼にとつてはイヤな形となって現実になる。戦車道のない学校を選んだにも関わらずこうして再びナイトメアに乗っている。オマケに大会への出場。もはや本末転倒ではあるものの、ここまで来てしまったならもう仕方ないと諦めをつけて空を見上げる。どこまでも青い雲一つない晴天は、抽選会場でもある多目的ホールの屋根に遮られるまで続いていた。

「・・・帰りたい」

そう一人愚痴を零す。中に入らないで一人こんなところに居る理由はただ一つ、ここに西住まほもいるからだ。会いたくないし、できれば会わせたくない。今のみほに、まだ彼女の存在はキツイからだ。だがそれでも「大丈夫」と笑って入って行ったのだから、みほのなかでチームメイトの存在がどんどん大きくなりつつあるのがわかった。とりあえずは、あの言葉も信じていいのかもしれない。しかしながら、個人的な理由でポツンと終わるのを待っているのも退屈ではある。

さて、どうやって時間をつぶそうか。そう考えていると不意に声をかけられた。

「やあ、大和じゃないか。こんなところで何してるんだい？」

聴こえてきた声は男。自分と同年代のもの。こんな風に気さくに話しかけてくるのは、同姓では数少ない一人だ。

「タカシか・・・ってことはケイもいんのかめんどくさい」

「きみは相変わらずうちのボスの事邪けんに扱うね・・・」

「だって距離感近いし、ウザいし。あと、隙あらば勧誘してくるし」

「そこは、まあ・・・あの人らしいと言えばらしいね」

長崎タカシ、サンダース大付属高校二年。戦車道では彼もナイトメアフレームのパイロットとして活躍している。騎乗するのは「トリスタン」。褐色の髪に少し茶色く見える瞳と、整った顔立ち。如何に

も好青年という言葉が良く似合う、そんな彼は大和の隣まで来てベンチに腰掛けた。

「きみの腕は僕らの界限じゃ相当なものだからね、そりゃ欲しくもなるよ」

「おまえがいる時点で俺いらねーじゃん」

「戦力が多いにこしたことはないからね。それに僕もきみが居た方が張り合いがあるし、なにより楽しいから」

そう言って笑みを浮かべるタカシ。自分とはまったく逆の性格ゆえか、数少ない同姓の知人とはいえ少々苦手意識もある。その為か彼のこういう笑顔と言動を直視できない大和はそっぽを向く事でその雰囲気から逃れようと試みた。

「・・・どうやら、一回戦の抽選が終わったみたいだよ」

携帯のバイブレーションが機能し、中での経過を報せる。その内容を見て、タカシは笑みを浮かべた。それは親しい友人に向けるようなものではなく。例えるのであれば・・・強敵を前にして、武者震いが止まらない。そんな印象を受けるようなものだった。だが大和はそれを見ることはなく、雰囲気で察したのか「そうか」とそっけなく返す。

「やけに興味なさげだね」

「やるからには勝つ。だから、俺は・・・俺達は負けない。たとえ相手が誰であつてもな」

「・・・そっか。なら、楽しみにしてるよ」

「おう。チキンでも焼いて待ってる」

「コーラはいるかい？」

「付けてくれ」

「わかった、ケイ隊長に言つとくよ。・・・それじゃ大和、また試合で」

そう言って、タカシは中から出てきたチームメイトのもとへと歩いて行った。大洗女子学園、第一回戦の相手は・・・サンダース大付属。

第六話 一触即発です！

一回戦の対戦相手となるサンダース大付属高校は、兎に角資金面で他校に比べ優っている。それを生かした物量と、隊長であるケイの戦略も相まって全国大会では上位をキープし続けている強豪校だ。そんな学校相手に戦い勝利しなければならぬとなると、みほの隊長としてのプレッシャーは相当なものだ。

「サンダースはうちと比べて何もかもが違いすぎる……いくら西住殿と悠木殿のお二人がいるといっても、これじゃ……」

抽選会のあった夜。帰宅してから動画サイトで投稿されている限りのサンダース関連の動画を観漁る優香里。少しでも二人の役に立ちたいと思つてのことだったが、これでは情報量が不足している。かくなる上は……と考えるもどうやってそれを実行に移すかまでが浮かばないまま、1時間。

「……おおう！コレならー！」

不肖、秋山優香里。偵察へと赴く。



最初にあの光景を見た時、その圧倒的な実力に視線が釘付けになった。初めて戦った時、あまりにも差がありすぎて終始何もできなかった。後に「死神」と謳われたその白い騎士は、突然の引退まで無敗を誇り、結局はその装甲に刃を突き立てはできても、斬り落とすなどできることなく。策によって失墜させることなど、敵うはずもなく。勝利の二文字をもぎ取れることは、最後の瞬間までなかったのを今でも覚えている。

その癖、騎乗者である少年はなんととつつきにくい。騎士として

の気高さなんてものはなく、聞いてみれば「ただやれることをやっただけ」ときた。そのやれることを、自分ができるようになる日はくるのかと足掻いたこともあったが、結局は上手くできなかったことなど一度もない。技術さえ盗めればと思ってみたものの、いざやってみればそれがどれだけバカげたことかがわかった。

「・・・ハア」

溜息をつく。シミュレーターのコクピット内で吐き出された彼の憂鬱そうなその吐息は、外部に漏れる事無く霧散する。思い出しただけでも軽くトラウマになってしまうほどの衝撃だったが、もうそうは言ってもらえない。今年の全国大会、正直自分の中で甘えがあったとタカシは己自身を律する。悠木大和は戦車道を辞めた。その噂が真実だと知り、正直なところ歓喜したのは事実だった。彼がいなければ、黒森峰に勝てる可能性も出てくる。もう一人は専属ではなくなった為それもない、そうなれば今がチャンスだと。そう思っていた。しかし現実が違う。

「ハア・・・タカシ！」

その日の練習を終え、シミュレーターから出た彼を迎えたのは、陽気な挨拶とはつらつとした笑顔だった。髪は金髪でウェーブがかつており、生粋の日本人と言われてもその容姿からアメリカ人だと言われたら信じてしまいそうな、そんな美しさがある。

「ケイ隊長。お疲れさまです」

「貴方もお疲れさま。どう？調子は」

ケイからタオルとドリンクを受け取り、一息つく。

「好調ですよ。そちらはどうですか？アリサ、大分頭を悩ませてたみたいでしたけど」

「問題 nothing さつき打ち合わせしてきたけど、かなりまとまってきたわ。そのドリンクとタオルも、あの子から差し入れよ」

「そうですね。これは後で何かお礼しなきゃですね」

「なら、勝利で」

「アハハ・・・言ってくれますね」

無理難題、と言ってしまうえばそれまでだが、タカシも負けるつもり

は毛頭ない。いくらあの悠木大和でも、今まで相手してきた、ランスロット”ではないのだから。機体が騎士の腕を引き出しきれないほどのスペックであれば、その差もグンと縮まる。とはいえ、実際やってみなければわからないというのも本音ではある。だから曖昧な笑みで返すということとその話題を濁した。

「もちろん！アンジーとも公約交わしてきたからね」

何やらいつもより上機嫌なのはその為かと当たりをつける。

「公約・・・？」

「Yes！だから今回は俄然、やる気つてわけ。だからつてわけじゃないけど、頼んだわよタカシ。貴方と、”トリスタン”の活躍、期待してるからね」

ウインクと言葉を残し、去っていったケイを見送った後、タカシは目の前に立つ巨人を見据える。吐出した二本の角のようなアンテナが特徴的な自身の愛機を見据えながら、タカシは拳を握る。

「・・・勝とう、”トリスタン”」

湧き上がる闘志を込め、タカシはそうつぶやいた。



学園艦が着港している間、手続きを取ること生徒たちは自由に陸に降りることが認められている。全国大会一回戦の相手が決まったことで、早速みほ達は試合前の景気づけにと雑誌にも掲載される程有名なスイーツショップに来ている。メニューを見て各々食べたいものを決めた後はテーブルに備え付けられているボタンで店員を呼ぶ。軽く押せば、戦車の砲弾を撃つ音が店内に響き渡った。ボタンの形と店内の雰囲気からはここがミリタリー色の濃い感じが窺える。

「なんだかこの音、クセになったかも」

沙織がウキウキしながらそう言うと、それに便乗して華が相槌を打つ。

「でもいいの大和君、ケーキ頼まなくて」

「大和君は甘い物苦手なの」

「生クリームなんて人間の食うもんじゃないと思ってる」

じゃあなんでついてきたんだと言おうとした麻子だったが、隣に座るみほの楽しそうな顔を見て言葉を飲んだ。ある程度の経緯を察した彼女はそれ以上会話に入ることにはせず、氷水を一口飲む。

「・・・あら、副隊長？」

顔をあげれば見知らぬ女の子。黒い服に赤いスカート、みほの事を見て副隊長と言ったという事を考えれば、おのずと答えは出てきた。

「ああ、元・・・でしたね」

白髪の髪の少女。言葉といい目つきといい、明らかにみほに対して見下したような態度に警戒心を抱く4人。

「お姉ちゃん・・・」

みほの一言で、大和を除いた4人がみほの視線の先に居る人物を見る。彼女と面影が似ていることと、優香里と華、そして沙織の三人はそこで目の前の人物がみほの姉である西住まほである事に気づく。

「まだ戦車道をやっているとは思わなかった」

久しぶり、なんて挨拶のような会話ではなく。ただ表情を崩さず淡々と話すその姿からは、みほの事がまるで見えていないまでの無情ささえ感じられる。冷徹、一言で表すならばそうなるだろう。同時に発せられる威圧感のような雰囲気、三人はたじろぐ。知識はあつた優香里でさえ、いつもの戦車道マニアぶりは鳴りを潜めているほどだ。

しかし。

「お言葉ですが、あの時のお二人の判断は間違ってますでした！」

少し上ずったにも関わらず、まほの雰囲気完全に屈する事無く立ち上がり発せられた優香里の言葉は、一石を投じるには充分なものだった。だがそれでもまほの表情は変わらない。

「部外者は黙っててもらえるかしら」

取りつく島などないと、エリカが突き放す。そのれに納得せざるを得なかったのか、先ほどの威勢はそこで止まってしまい、それどころか謝罪までして座ってしまう。

「一回戦はサンダースと当たるんでしょ？無様な戦いをして、西住流の名を汚さないようにね」

皮肉。そして嘲笑い。さらには侮辱。勝てるわけがない。その確信と侮りから去り際のエリカの言葉と笑みは沙織達の怒りを買った。

「何よその言い方!？」

「あまりにも失礼じゃありませんか!」

立ち上がり抗議する沙織と華、そして優香里。それに対し、まほとエリカは足を止めて振り返る。

「貴女達こそ、戦車道に対して失礼じゃない？無名校のくせに・・・。この大会はね、戦車道のイメージダウンになるような学校は参加しないのが、暗黙のルールよ」

その言葉からは、もはや相手に対する配慮など微塵もない。完全に喧嘩を売るような言葉に反論しようとした三人だが、後ろの麻子から言葉が飛ぶ。

「強豪校が有利になるように、示し合わせて作った暗黙のルールとやらで負けたら恥ずかしいな」

礼儀知らずには礼儀知らずで。売り言葉に買い言葉。エリカに対し皮肉を飛ばす麻子の言葉に同調して沙織が言い返す。

「もし、アンタ達と戦ったら絶対負けないんだから!ホラ大和君もっ」
我関せずとコーヒーを飲んでいた大和の腕を掴み、立ち上がらせて背中に回り前に出す沙織。意外にも強い腕力にされるがままになってしまった大和は背中を沙織に押されつつ前が出る。すると、今までエリカの後ろで無表情だったまほが顔を覗かせた。

「.....」

ジツとこちらを見るまほに苦虫を噛みしめたような顔になる大和。

「貴方、隊長の許婚にも関わらずその子と一緒にいるのね」

「許婚!？」

余計なことを。そう言いたげにエリカを睨む大和。

「も、元々それは親同士が勝手に決めたことだろ。俺とまほの意思はそこにはない」

「まほお!? 大和君てば、みほって子が居ながらそうなの!」

「西住が二人もいたらややっこしいだろ!? それに幼馴染なんだから今更苗字で呼ぶ必要もないだろうが!」

面倒くさい状況がさらに輪をかけて拍車がかかった為に、この流れを作った発端のエリカをまた睨む。だがこの場合、何を言っても勝てる気がしない為グヌヌと唸る。それを見て笑いをこらえるエリカ。屈辱を味わった大和の沸点はもはや席からなだめようとしているみほの言葉すら届かない所まで登り、限界を迎えようとしていたその時。ピシヤリとその場に声が響いた。

「他人を揶揄うのはよせエリカ」

その声に全員の視線が集まる。背の高い男。黒い制服を着こなすその姿はモデルかと思うような美しさ。

「いやあ、妹が申し訳ない事をした。口は悪いが、根は優しい子なんだ。許してほしい」

こちらの前まで来て頭を下げる男。遠目から見ると高い身長が、目の前まで来るとさらに高い。180は軽くある。エリカと同じ銀髪で、容姿は目つきはキリツとしながらも優し気な色を宿している。

「ちよつ、兄さん!」

「・・・悠木。戦車道を再開したんだな」

「・・・なるほどな。俺が居なくなったら後、誰が専属騎士に選ばれたのかって思ったけどそうか・・・留学から帰ってたんだな」

「ああ。お前とはすれ違いだったようだ。まさかこんな形で再会することになるとはな・・・みほさんも、お元気そうで安心しました」

「いえ、あ、そんな・・・はい」

みほに挨拶した後、少しのらみ合いが男と大和の間で続く。相手の方は大和のように敵対心むき出しというわけではないが、醸し出す二人の雰囲気、一触即発なまでの重みがある。一分にも満たない短い間で男は踵を返したが、見ている側の沙織達はその間がとても長く感じられたようで、離れたと同時に溜息をつく。

「勝ち上がればいずれ戦う事になるだろう。その時を楽しみにしている……それでは。——ああ、ここの会計は私が支払っておきます。粗相をした妹のお詫びです」

そう言つて、三人はその場を立ち去つた。

「凄かつたですね、今の殿方……」

「同じ制服を着てたつてことは、黒森峰の生徒か？」

「……逸見武蔵。二年の途中で海外留学してた、悠木殿の前に専属騎士として所属していた方です」

「そうなの？」

「ああ。そして……あの人が留学するまで、俺は一度もあの人に勝つた事はない」

それを聞いて絶句する沙織と華。大和の実力は実際に目の当たりにしているし、優香里からも耳に胼胝ができるほど聞いているからわかる。それよりも強い、しかも一度も勝てなかつたという事はつまり……。

「……勝てるのかな、私達」

「勝つさ」

沙織の沈み切つた弱気な発言に、はつきりと即答する大和。見上げると、その眼には闘志が強く宿つていた。

「ここまでデカイ面されて引き下がるなんてできねえ。俺は勝つ気でやる。みほ、お前はどうか？」

大和の言葉に全員の視線がみほに集まる。普段の彼女ならここであたふたしてしまうところだが、今回は違つた。まほが去つたあとを見つめながら、強く頷く。

「私も、もう逃げない……」

確固たる意志を見せたみほに口角をあげる大和。

「んじや、作戦会議でもすつか。まずはサンダース……だな」